

ダブリン解説——『ユリシーズ』、 民族、女性性、書くこと¹

武 田 美保子

1 周縁から中心へ

アイルランドは長い間、英国の植民地であったにもかかわらず（それだからこそと言うべきかも知れないが）、数多くの優れた文学者を排出し、「英文学」の繁栄に貢献してきた。その屈辱的な歴史のもとで、彼らの母国アイルランドに対するスタンスの取り方はさまざまな屈曲を経ておのおのの違いをその作品・ライフスタイルのなかに鮮明に反映させている。アイルランド出身の痕跡を見事なまでに拭い去ってオクスフォードの寵児になりおおせた Oscar Wilde。この国の伝説や民話に大いに依拠することで愛国の念をその作品群に昇華させた J. B. Yeats。多くの劇作を英語とフランス語で行ない、無国籍コスモポリタンと化したかにみえる Smuel Beckett。こうしたなかで、終生エグザイルでありながらその著作においては決してダブリンを離れることのなかった James Joyce の母国との関係は、極めて独特である。² 一般的には政治に無関心で、アイルランドの政治には沈黙を通したといわれているジョイスだが、彼独自の民族、性、言語などに対する政治学は彼の作品の至る所に窺うことができる。その独特な政治学を、彼の作品のうち特に *Ulysses* (1922) の分析を通じて、

1 本論文は、日本英文学会中部地方支部第 45 回大会でのシンポジウム「変容する都市」のパネリストとして発表した内容に基づいて、加筆訂正したものである。

2 アイルランドを代表する 4 人の作家たちの、さらに詳しい特質と相違については Richard Ellmann, *Four Dubliners: Oscar Wilde, William Butler Yeats, James Joyce, Samuel Beckett*, New York: George Braziller, 1988 を参照。

ダブリンという都市の描写のなかに読み取るのが本論文の目的である。

ジョイスは1912年に、彼には珍しくアイルランドへの熱い思いを吐露した、“The Mirage of the Fisherman of Aran” というエッセイを書いている。アラン島は、「日の没する国」アイルランドの西の端に位置し、初期キリスト教の時代には「聖人の島」と呼ばれ、ゲールの言語と習俗を今なお残すいわばケルトの拠点として、アイルランド（ケルト）文芸復興運動のさなかには、イェーツらによって再発見されることになる。ここには、ゴールウェイからアラン島へ渡り海図を眼にした際に彼を襲った考えが表明されているのだが、そこからはこの土地に対する彼の特別な思い入れが窺える。今は衰退しヨーロッパの辺境と化しているゴールウェイの港が、英国に代わって、大西洋からカナダへと伸び更に西の世界へと広がる新しい航路の窓口として再びよみがえるのだ、と彼はいう。ちょうど「聖ブレンダン」がキリスト教の布教を目的として、アラン島から、未知の世界へ乗り出していったように。それによって新世界の息吹きは、この港からダブリン、ホウリヘッドを經由して、ロンドンへと流れ込むのだと。³ 現実のベクトルとは逆向きの、辺境から中心へのこの転換には、長い間英国の支配下にあったアイルランドに対するジョイス自身の屈折した心情が読み込めるだろう。

負を正に、ミクロをマクロへと巧妙に反転させるジョイス独特の逆ベクトルは、*A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) のなかにも窺うことができる。Stephen はダブリンからヨーロッパへ旅立つ直前の1904年4月3日の日記に、「タラへの一番の近道はホウリヘッド経由だ」と記す。かつてこの国を統治していたアイルランドの王たちの居住跡が石の廃虚として残る歴史の地タラの丘へは、英国およびヨーロッパ経由が近道だという、この逆説。周縁と中心、極小と極大、の自在な転換によるこの価値の力学の攪乱こそが、ここで目論まれていることに違いない。こうした価値の反転を可能にする彼の力

3 James Joyce, *The Critical Writings of James Joyce*, New York: Viking Press, 1959, 235.

業は、故郷の街ダブリンの描写に極めて顕著に示されている。

2 負の女性性としてのダブリン

『ユリシーズ』に描かれているダブリンがすぐれて記号都市であることには、疑問の余地はないだろう。ここには、新聞、商業広告、演劇、雑誌など、ありとあらゆる当時のメディアによって発信される都市の記号が氾濫している。そして登場人物たちがこうしたメディアによって発信される都市の記号の熱心な解読者であることは、「意識の流れ」手法によって隈なく描き出されている。だから小さなエピソードの各々に小見出しがつけられ新聞に擬せられている第七挿話「アイオロス」、ヴィクトリア朝の女性雑誌の文体で書かれている第十三挿話「ナウシカア」などに顕著にみられるように、ダブリンは「メディア都市」であるといつてよいだろう。⁴ また、演劇を中心に展開された当時の文芸復興運動に対抗して書かれたといわれる第十五挿話「キルケー」に見られるように「劇場空間としての都市」でもある。そして Homer の *Odysseia* に枠組みを借り、さまざまな書物からの引用の織物であるこの小説は、何よりも「書物としての都市」であると言えよう。以上のように多様な側面を持つダブリンに対して、ここでもうひとつのダブリン解釈を呈示したいと思う。それは女性の身体としてのダブリン、それも極めて負性を帯びた女性性としてのダブリンである。しばしば負の刻印を押されている女性性・女性の身体が、先にあげたようなジョイスの筆の力によるジェンダーの攪乱のなかで、次第に積極的価値を帯びていくさまを以下にみていくことにしたい。ダブリンの女性性を示唆していく際に、首都ダブリンはしばしばアイルランドそのものと重ねあわされていることに気づくだろう。また、何故ダブリンを彼の作品舞台に選んでいるか

4 この点に関しては、Marshall McLuhan, *Understanding Media: The Extensions of Man*, London: Routledge and Keagan Paul, 1964 (M. マクルーハン『メディア論』栗原裕・河本仲聖訳 みすず書房、1987年)に詳しい。また、R. B. Kershner, *Joyce, Bakhtin, and Popular Literature: Chronicles of Disorder*, Chapel Hill and London: The U of North Carolina P, 1989も参照のこと。

についても、ジョイス自身の次のような発言がヒントを与えてくれるかも知れない。

偉大な作家というものはまず第一に民族的なのです。...民族性が強烈であって初めて、その結果国際的になるのです...わたし自身はといえば、書くものはいつでもダブリンについてなのです。ダブリンの核心に迫りうるということは、つまるところ世界のあらゆる都市の核心に達しようということにほかならないのですから。個別の中にこそ普遍が含まれているのです。⁵

そもそも「ダブリン」という名前には、ケルト民族の隷属による屈辱が含意されている。「編み垣の浅瀬の町 (Baile tha Cliath)」というももとのゲール語の名は、デンマークからのヴァイキングの侵入者たちがリフィー河を見つけた際につけた呼称「黒い入江 (Dubhlinn)」に取って代われ、今日に至っている。ヴァイキングの荒くれ男たちの侵入と、それに続くイギリス人による植民地化という長期にわたる隷属の歴史のなかで、この国の人々がアイルランドを、また首都ダブリンを、男に陵辱される女の身体という自虐的メタファーのもとに捉えるようになるのは、むしろ当然のことかもしれない。スティーンは、植民地時代に詩や歌でおおびらに国名を口にしないために用いられた「絹の牛たち」「貧しい老婆」というアイルランドの古称を、ミルク売りの老婆と重ねあわせながら、次のように夢想する。

絹の牛たち、貧しい老婆。これらはむかし彼女に送られた名前、さまよい歩く老婆。不滅なる存在が卑しい姿に身をやつし、己の征服者と放埒な裏切り者に仕えている。どちらからもなぶられている娼婦。ひそやかな朝の使者。⁶

5 Richard Ellmann, *James Joyce*, London: Oxford UP, 1977, 520 参照。

6 James Joyce, *Ulysses*, New York: Random House, 1984, 12. 以下、このテキストからの引用はすべてこの版に拠る。

また、Mr. Deasy は、この国の歴史を次のように括ってみせる。

このわしらの国に初めて外国人どもを導き入れたのも、ひとりの女だった。マクマロウの妻とその夫、ブレフニの王子オラークですよ。パーネルを失脚させたのも女だ。(29)

Finnegans Wake では冒頭から、ダブリンを流れるリフィー河のうねるような流れは、女の身体を想起させるのだが、ここでもこの女の身体は多くの男たちの間を「泳ぎ」わたる。

話して、話して、どういうふうにも男たちを泳ぎきったの、根っからのいちゃつき上手の可愛い悪魔だったにしても？田舎者たちの前に危うい魅力をふりまきながらフォンテ・イン・モンテからタイディングタウンにそしてタイディングタウンから海まで。次ぎから次ぎへとくっついたりぶつかったり、横腹をそっとたたいたり出っ張りにさわったりゆったりと満ちぐったりと引きすべるように東の方へ。誰が最初に押しわけていったの？⁷

時には矜持と屈辱がないまぜとなった貧しい老婆として、また英国と自国の宗教的裏切り者によっていたぶられる娼婦として、そして姦通を犯して国の崩壊に手を貸す女、さらには至る所からやってくる男たちを次々とうけいれる女として、性的に貶められた女、もしくは性的に奔放な女として表象されるアイルランドもしくはダブリン。それも先の『ユリシーズ』の一節では、実際に妻に裏切られたのはマクマロウではなく、マクマロウこそがオラークの妻とかけ落ちしたのだという歴史的事実がねじまげられてまで、その負性は強調されている。これまで世界史の中では、征服者たる植民者たちを男、被征服者たちを女とするジェンダー化がされてきたように、ダブリンという都市もまたこの二項対立のもとに、敵に身を任せる女として表象されている。しかも、この裏切る女というダブリンのイメージは、『ユリシーズ』においては、Boylan と姦通

7 James Joyce, *Finnegans Wake*, New York: Faber & Faber, 1939, 202.

する Molly と重ねあわせられ、1904年6月16日の Leopold Bloom を終日さいなむ。ヨーロッパ文明の礎を築きながら周縁に追いやられたイスラエルの民ブルームは、ユダヤ教からカトリック教への改宗、妻の裏切りを始め、父親の自殺、息子の死とそれに続く夫婦間での性行為の不在、などによる「非男性化 (demasulinization)」もしくは「女性化 (feminization)」によって男性的主体の位置を篡奪されたダブリン人の典型と化するのである。このように、ダブリンとは、裏切る女であるだけでなく、裏切られる男とも表象され、徹底的に女性性の刻印を帯びているのだ。

このダブリンには、さらにもうひとつ「小豚を食らう母 (the sow that eats her farrow)」という否定的な女のイメージが重ね合わされている。テクストのなかでしばしば言及される「クロッピー・ボーイ」のバラッドは、自らの臨終に際して祈りを捧げてほしいと信仰を強いる母の願いを退けたスティーヴンの罪悪感と深く関わっている。このバラッドは、祖国のために出征することになった小作農が、これまでの罪——たった一度だけ、たまたま母親の墓の傍を通りかかったときにお祈りをするのを忘れたこと——を告白するが、告白を済ませて告解室を出ると、司祭だと思っていた男は実は英国兵士で、その英国兵士は小作農を即刻絞首刑に処するよう命ずるといふものである。この少年の思い違いは、カトリック司教とイギリス国王の「男性的」制度の正体を暴露するだけでなく、こうした権威と母的存在との屈曲した関係をも示唆する。スティーヴンの苦境は、英国とカトリック教会という二つの抑圧に苦しむアイルランドのそれと二重映しになるのだが（「ぼくは、イギリス人とイタリア人という二人の主人に仕える召し使いだ」(U. 17))、「母からの愛／母への愛 (Amor matris)」によって引き裂かれたスティーヴンの、植民者英国と宗教という男性的・父的権威への反抗心は、この母の存在によって鬱屈したものにならざるをえない。彼の屈折した思いは、現実と幻想が錯綜しあう「キルケー」の章で劇化され、彼は Old Gummy Granny (アイルランドの別名) に姿を借りた母によって、イギリス兵をやっつけるよう駆り立てられる。

(スティーヴンの手に短刀を押しつける。) さあ、あんた、やつをやっちまいな。午前8時35分におまえは天に昇って、アイルランドは自由になるんだよ。(彼女は祈る。) おお、神様、この人を召したまえ! (U.490)

息子にカトリックの信仰を強い、また愛国心に訴えて彼を英国との戦いに駆り立て、ついには死に至らしめようとする「小豚を食らう母」の圧力に対して、スティーヴンは“*Nothung!*”(ワーグナーのオペラの主人公ジークフリードの持つ魔法の剣の名/クロッピーのような処刑はごめんだ)(U. 475) と呼び、手にしていた杖でシャンデリアを打壊す。ここでスティーヴンに「理性」と呼ばれる「象牙の杖」は、破壊的なファロスとして、母の亡霊を打砕くのだが、そもそもこの破壊行為自体は、宗教的父(=Father)の呪縛を逃れて、芸術家として自由に飛翔したいという要請からきたものであるため、この杖は、「記述の神トト」の持つ創造性の証のペンでもある。アイルランドに服従を強いる英国の法と、信仰を強いる教会の二重の男性的権威に対する「息子」の反抗と自由への希求は、このように「母なる」アイルランドからの拘束の網の目をくぐり抜け、その抛り所を書く行為の証としてのペンにもとめようとするのだ。

3 ジェンダーの攪乱

ダブリンの女性性と英国および教会の男性性という二項対立における階層関係は、しかしながら『ユリシーズ』というさかしまな世界では、決して負/正という安定した優劣関係へと収斂していくことはない。というのも、父権的・男性中心主義的世界を支えるはずの「父の名」は、ここでは常に懐疑にさらされているからである。父性の神話を信じることのできないスティーヴンは、「父性とは虚構にすぎない」という。なぜなら母親がだれであるかは常に明確であるが、父親がだれであるかをだれも証明することはできないのであるから。だからこそ「父 (begetter)」は「息子 (begotten)」へ「神秘的な遺産、使徒の相続」を譲り渡すことにより、それを根拠あるものに仕立てようとするのだ。

これと酷似した議論をわれわれは、フロイトの『モーゼと一神教』(1939)にみることができるだろう。ここでフロイトは、母権制的な社会秩序から父権制への移行に伴って、感覚的な直接知よりも知性が重んじられるようになる過程をたどり、次のように言う。「父親がだれであるかのほうが、母親の場合のように感覚的な証拠によっては確認できないにもかかわらず、母親の身元よりも重要であるとみなすこと、それゆえ子供は父親の名を名乗り、彼の相続人となるべきだと判断することが知性の進歩である」と。⁸ スティーヴンの言葉を借りれば、「聖母」ではなく「この神秘」を基盤として教会の権威は築かれている、つまり「母の愛」の上にはなく、「空虚」の上にヨーロッパの伝統は成り立っているのだ。

スティーヴンのこの懷疑は、ジャック・デリダの男根的論理中心主義批判の議論と密接に結びつく。両者の近似性は、デリダ自身による『ユリシーズ』論にもあきらかである。⁹ デリダによれば、ヨーロッパの形而上学は、「書くこと」を「ロゴス」の下位におき、父の名、起源、神、真実、理性といった「現前性」に価値と権威を与えることにより、その対立項に負の属性を帯びさせてきた。こうして現前／不在、真実／誤謬、同一性／他者性、理性／感覚、男性性／女性性といった二項対立の第二の項を、第一の項の周縁に置くことによって西洋の伝統は吊り支えられてきたのだ。それゆえデリダは、その伝統を支える階層関係の恣意性を露呈し、両者の関係の脱構築を図る。たとえば『尖筆とエクリチュール』においては、ニーチェの文体を分析しながら、デリダは西洋的階層関係を脱構築するための変数として、女の形象化に依拠する。ここでは女は、主題(=サブジェクト)であるとともに、主体(=サブジェクト)でもある。このとき女の位置は、主体／対象という男根論理中心主義的二項対立をずらし、自己同一性を保証する「父の名」を脱構築してしまうことになる。

8 Sigmund Freud, *Moses and Monotheism*, New York: Vintage Books, 1939, 150-1.

9 デリダによるユニークな『ユリシーズ』論を参照。Jacques Derrida, *Ulysses gramophone: Deux mots pour Joyce*, Paris: Galilée, 1987.

このように脱構築は、中心／周縁というそれ自体中心化の論理に加担し、単にみずからの周縁性を主張することによってなされるのではなく、中心と周縁との位置、区別それ自体の位置を曖昧にし、ずらすことによってなされる。つまり「中心と周縁の間を往復」し、それによって両者の位置をずらすことによって、その位置関係を逆転することが可能となるのだ。¹⁰ ちょうどジョイスが、周縁的なものと中心的なものとを列挙し、男性性と女性性の境界を臙げにし、極小を極大化し、極大を極小化し、マイナーとメイジャーとの差異を攪乱させ、それによって互いの位置の逆転を試みたように。ついでながら、ジョイスのこのテキスト内における、父性の虚構性だけでなく、人の自己同一性を証明するはずの名前への懐疑なども、男根論理中心主義を批判するデリダの理論と如実に連動しあっているのである。

だからこそ『ユリシーズ』においては、悪夢のような「キルケー」の夜の街で、アイルランドとイギリスは緑と赤に分かれて壮絶な戦いを展開し、正／負、男／女、支配者／被支配者といった階層関係は次第に揺らぎを見せ、負性が正性へと反転し、ジェンダーの境界は攪乱されていく。実際ここでは、ジェンダーの境界はしばしば臙げで、両項は交換可能なものとなり、両性具有の記号はいたるところにあふれだす。たとえば、この日ダブリンで上演される『リア王』と前日の『ハムレット』公演は「男性詐称者」の Mrs Bandman Palmer によって演じられ、シェイクスピアはスティーヴンによって、「両性具有の天使で、自らが自らの妻」(175) でもあり「自らが自らの父である」と称えられ、彼のシェイクスピア論を聞いた Mulligan は「わたし子供がお腹にいるの。わたしの頭のなかには、まだ生まれていない子供がいるの」(171) とおどけてみせ、一方「勇敢な女性」Mina Purefoy は彼女の9回目のお産を「男らしく」(343) やり遂げる。「近頃の娘たちは新しい女のためのブルーマーを着て自転車に乗る」(626) といったように、「新しい女」たちのための衣装「ブルーマー」の

10 Jacques Derrida, *Positions*, Paris: Minuit, 1972. [高橋允昭訳『ポジション』青土社、1981年]

流行によって、男女の境界は衣装の上でも朧げになりつつあるのだが、そもそもブルームは、「女の虚弱さ、男の強健さ」といった二分法が「虚偽の推論」(604)に他ならないことを見抜いている。こうしたジェンダーの揺らぎは、「ワルプルギス・ナハト」たる15章では一層激しく前景化され、ブルームのかつての恋人Mrs Breenは男装して登場し(361)、トルコの衣装を纏ったモリーはブルームに主人が奴隷に対するような態度で接する(359)。さらにブルームは、医学的に「両性性的に異常」、「手つかずの処女」、「新しい女性的な男のみごとな例」(402-3)という宣告を受けた後、8人の子供の「母親」となるに至るのである。ジェンダーの揺らぎは、もちろんここダブリンにおいては単に男／女という階層関係の反転・転覆という問題に留まらず、同時に民族の問題、英語による支配といったことも含んだ言語の問題、父と子や母と子の関係を含んだ父権的制度の問題などのポリティックスへと連なり、ついには「書く行為」とアイルランドとの関わりへと連鎖してことになる。

4 書くことと女性性

さて、父的・男性的権威への反撃のよりどころとしての「書く行為」は、『ユリシーズ』では、男性的なファロスの力としてのペンというよりは、女の身体としてイメージされている。男性的な力に対抗するのに、男性的力をもってするのではなく、やはり周縁的な女性性に依拠しようとするのだ。「イタケー」の章でイスラエルとアイルランドの各々の特徴が記されるなか、両者の「考古学的、系譜学的、聖人研究学的、注釈学的、説法学的、地名学的、歴史的、宗教学的の文献」として、「ラビたちとクルデたちの著作、律法、ユダヤ不成文律法タルムード（ミシュナとゲマラ）、旧約聖書ヘブライ語校訂本、モーセの五書、ダン・カウの書、バリモートの書、ハウスの花束、ケルズの書」(564)が挙げられる。このようにして、後半のあまり人に知られることのないアイルランドの中世の写本は、世界史上大きな意味を持つユダヤ・キリスト教の世界最古の書物と肩を並べる。しかも、その目録の最後に目立たないように忍びこまされている「ケルズの書」こそは、もっともアイルランドの古典的書物として、

ジョイスがヨーロッパ放浪中は片時も手放すことのなかったものである。この「ケルズの書」は、「ケルトの想念」が、「顛倒、歪み、逆転、裏返し、変貌、そして増殖」といったいかにもケルト的文様によって視覚化された、¹¹ いわばアイルランドの精髓とでも言うべき書物である。

ローマでもチューリッヒでもトリエステでも、わたしはどこに行くにもそれを持ち歩き、何時間もその技に見入りました。それは何よりも純粋にアイルランド的で、頁いっばいに広がる頭文字のいくつかは『ユリシーズ』の一章の本質を成す性格を持っています。たしかに、わたしの作品の大部分は、その精巧な彩色飾になぞらえることができます。作品のどのページを取り出しても、これがほかならぬこの作品だと分かるようでありたいのです。¹²

『ユリシーズ』によって『ケルズの書』に匹敵するような本を書きたい、との思いは、当のテキストの第十四挿話のなかにもひっそりと挿みこまれている。「ドルイドラムの印刷屋で、二人の女流図案家に印刷と装丁をさせるんだ。しょんべん緑色の鞣し皮表紙で。芸術的色合いにおける細心技術で。現代においてアイルランドから生まれた最も美しい書物(346)」。ついでながら、『フィネガンズ・ウェイク』では、『ケルズの書』は『フィネガンズ・ウェイク』から派生し、ジョイスによって書かれたということになっている。ケルズの写本についてのアルジョンは第十二挿話「キュークロプス」を始めとしてい至るところに見られるが、ジョイス自身、この書の中身とともに、螺旋状に精巧に彩られた図案にも心引かれていたようで、そうした特徴は例えば第九挿話の図書館司書が館内をステップを踏みつつ移動する際の「舞踏的語り(Choreographic narrative)」などに窺えるかも知れない。¹³

11 鶴岡真弓 『ケルト／装飾的思考』ちくま学芸文庫 1983年、74頁。

12 Ellmann, *James Joyce*, 558-9 参照。

13 Bernard Benstock, *Narrative Con/Texts in Ulysses*, London: Macmillan, 1991.

しかも、ジョイスが周縁性の復権を彼の昨品に託したこの「書く」という行為には、常に「女性性」が刻印されており、また常に女性的なるものが喚起されている。第十四挿話の産院の場面で、女性の豊穣性を讃えながらスティーンは、創造について次のように言う。

「みな人よ、時の廃虚は永遠の館を築く」。これは何の意か。欲情の風は茨草を吹き荒らせしが、後には、茨草は時の小園に薔薇と咲き誇る。心して聞き給え。女の子宮において言葉は肉体となり、創造主の魂において、変わりゆくあらゆる肉体は、変わることなき言葉となる。これが後産なり。すべての肉体は汝に帰す。(320)

時の経過の中で変わりゆく「肉体」が、変わることはない「言葉」となり、不滅性を獲得するために、「言葉」が「肉化する」という転倒が、「女の子宮」もしくは「創造者」の魂のなかで起こる。このように、負性を負わされてきた女性的なるものは、この書くという創造の力によって何者にも侵されることのない永遠性・不滅性をわがものとするのが可能となるのである。ここでは創造者としての作家の魂は豊穣な「女の子宮」と同化されるのだ。

このように、ジョイスにとって、アイルランド的なものの表象としての女の身体は、故郷ダブリンについて記す彼の言葉が書き込まれるマトリックス（母体）でもあり、「書かれる」＝「読まれる」ことによってたえず意味決定性を拒む女の身体の上に刻まれ、築きあげられたのがダブリンという都市でもあり、『ユリシーズ』という書物なのだ。こうして、異国にありながら、母国の伝統を徹底的に女の身体というマトリックスの上に書き込むことによって、ダブリンは初めて「麻痺した」隷属的な「ヨーロッパ第七番目の」侘びしい都市から、世界的な普遍性をもつ都市へと生まれ変わるのだ。

5 ノラというマトリックス

『ユリシーズ』の最終章「ペネロペ」のモリーによる句読点無しで流れる独白は、女の身体と言葉とが渾然一体となった最も端的な例といえるかも知れな

い。「イエス山に咲くぼくのはなイエスといっておくれとそしてわたしはまず彼をだきしめイエスそしてかれをひきよせ彼がわたしの乳房にすっかりふれることができるようににおやかにイエスそして彼の心臓は高鳴っていてそしてイエスとわたしはいったイエスいいわよイエス」(704)。ブルームの求愛を初めて受け入れたあのハウスの丘での愛撫の場面の追憶へ何度も何度も立ち返ることによって、モリーが彼との愛を肯定して終わるこの文体は、ジョイスの妻ノラがジョイスにあてた手紙を反映しているといわれている。彼がきわめてアイルランド的なこのノラ・バーナクルを、たえずかたわらに従えてヨーロッパを放浪したさまは、最もアイルランド的なものと彼が考えた『ケルズの書』を携えてヨーロッパを放浪したという事実と奇妙な相似を成している。

ジョイスにとってノラがどのような存在であったかは、ヨーロッパに旅立って以来の最初の帰郷である1909年の夏に、彼がノラにせっせと書き送った手紙のなかに窺うことができるかも知れない。この時彼は、彼がノラに求愛していた当時、ノラが彼だけでなく彼の友人のコズグレイヴともつきあっていたことを知らされ、ノラの不実をなじる手紙を送っている。その後別の友人からこの話が「汚らしい作り話」であったことを納得させられ、一転してノラに熱烈な求愛の手紙を送る。そしてかねてからの約束であったノラの故郷ゴールウェーに息子とともに行き、ノラの母親に会い、彼女から「オームリーの乙女」(これを君の歌とジョイスは呼ぶ)を歌ってもらい、少女時代のノラのイメージに浸されおおいに満足したことを伝えている。また第二回の帰郷に際しては、ダブリンに対する呪いの言葉を吐くかと思えば、ノラへの想いと祖国への愛を確認したことを書き伝えている。つまりジョイスに対する(架空の)裏切り、素朴さ、愛憎、それらをすべて合わせて、ノラは彼にとってアイルランドそのものであったのかも知れない。

ここはきわめてアイルランド的だ。私という男は長いこと外国暮らしをし、またいろいろ南国で生活を送っているので、どんなものにもですぐアイルランドの声を感じる。テーブルがきちんとしていないのもアイルランドだからこそであり、彼らの顔に浮かぶもの珍しげな表情も……

私は彼女の中に、世界の美と、生そのものの不可思議さと美を、そして、私がおの子供である民族の美と非運のイメージを、… 愛してきたのだった。¹⁴

最もアイルランド的な書物と、故郷そのもののような女を傍らに措き、故郷から遠く離れた中央ヨーロッパでダブリンについて書く。ここには「タラへの最も近道はホーリヘッド経由だ」と記したジョイスの創作の回路が窺えるだろう。さらにまた、書くことと女の身体との密接な相互関係についても推測することができるかも知れない。

だが、ノラのほうはどうだったのか。裏切る女、アイルランドそのものである女、「美と非運」のイメージとしての女、として夫の「書き物」のなかで表象され続けたノラ自身のほうは。ジョイスの死後半年を経たノラの告解室における告白という形式をとった、インゲ・イズラエルの『クリーン・ブレスト——告解室のノラ・ジョイス』は、『ユリシーズ』の最終章のモリーの独白を、このノラの視点から「読み換え」たものとして、きわめて興味深い。

書き出してから七年間あの人話してくれるのはあの本のことばかりうんざりでしたいっそ神様があの人の舌を腐らせてくださればそう思ったくらいですでもとても慈悲深い神様ですからジムの心を読み取ってくださったよこしまなところなど何もないと分かってくださったそこにあるのはただコトバに対するとめどない渴望と認めてくださったあの人ったらどんなに詰らないことでもとことん知りたがるクソみたいな失礼神父さま屑みたいなけがらわしいことさえなにもかも噛みこなし呑みこんでそのあげく吐き戻します雑多なものが意味ありげに入りまじった雑炊のようなものを見事な芸当だなんて言う人もいたりしてそれはそれで結構でしょうよでもねこまるんですあたしはあそこにはあたしの言葉もまぎれこまされているんですもの「僕は小石みたいなものさノラ君の手の中の小石僕を書くものに深遠な真実の心うつものがあるとすればそれはすべて君からうまれたのだ」

14 *Letters of James Joyce*, vol.2, ed. Richard Ellman, New York: Viking Press, 1957, 266.

あの人はそう言いましたあたしが喜ぶとでも思ったのでしょうかけれどもうれしいどころか気が重くなるばかり¹⁵

フランクフルトに生まれ、青春時代をダブリンで過ごし、カナダに住むこの作家によるこの戯曲は、ノラとジョイスと彼の書き物である『ユリシーズ』との間の三角関係がどのような性質のものであったかを浮かびあがらせてくれる。モリーの独白を思わせるこの語りは、ノラの身体を漁る芸術家の夫への愛憎とその息づかいまで彷彿とさせる。恐らく『ユリシーズ』という小説は、たとえ作家のファリックなペンの力によって女の身体というマトリックスに刻まれた書物なのだとしても、少なくともモリーの独白の彼方からこのノラの肉声を「読む」可能性へと開かれたテキストでもあるのだ。

6 ポリティカルな都市ダブリン

故郷ダブリンの負性を見据え、ヨーロッパという回路を経ることにより、負を正へと反転・逆転させることで、ダブリンは地方都市でありながら、永遠の相貌を持つ独自の都市へと変貌する。世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパを、また英国を襲った、ジェンダー、民族などをめぐるさまざまな地殻変動のダイナミズムをいち早く同時代的に映し出す、1904年6月16日のダブリンは、すぐれてポリティカルな都市でもあるのだ。

15 インゲ・イスラエル著 大澤正佳訳 「クリーン・プレスト——告解室のノラ・ジョイス」、『へるめす』44号、岩波書店、1993年、134頁。